



# ドウダンツツジ苗木生産マニュアル

令和 7 年（2025 年）

茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所

# 目次

---

I	はじめに	1
II	育苗場所の準備・作成	2
	コラム① 遮光資材について	3
III	実生苗の増殖技術	
	①採種編	4
	②種子選別（水選）編	5
	③播種編	6
	④鉢上げ編	8
IV	挿し木苗の増殖技術	10
	コラム② 播種・挿しつけの適期について	13
V	追肥方法	14
VI	厳寒期の管理	15
	コラム③ ドウダンツツジの育苗期間について	15
VII	苗の植栽方法	16
VIII	育苗スケジュール	17
IX	ドウダンツツジ苗の生産コスト	18
X	【参考】ドウダンツツジの生育環境について	19

## 注意書き

- 本資料を加工して利用する等の二次使用は禁止します。
- 本資料作成にあたり、試験に供試したドウダンツツジの種子及び挿し穂は、いずれも自生地 of 地権者の許可を得た上で採種しています。また、自生地の土壌採取について、県立自然公園に該当する地点では、事前に県環境政策課の許可を得た上で実施しています。

# I はじめに

ドウダンツツジ（種名「アブラツツジ」）は美しいグリーンの細やかな葉を持つツツジ科ドウダンツツジ属の落葉低木で、インテリアグリーンとして国内外で需要が高まっている。茨城県における枝物生産においても、主力商品として出荷量を伸ばしているが、現状、その全てが山林内に自生する株から枝を採取して出荷されており、ドウダンツツジの生育は極めて遅いことから、将来的な資源の枯渇が懸念されている。

そこで、山間地帯特産指導所では、ドウダンツツジの苗木増殖技術の確立に向けて、試験・検討してきた。本マニュアルはその成果を取りまとめたものであり、茨城県内の枝物生産者をはじめ、ドウダンツツジの苗木増殖に関心のある方への技術普及を目的として作成したものである。

## ※本マニュアルにおけるドウダンツツジの呼称について

本マニュアルで取り扱う樹種は「アブラツツジ (*Enkianthus subsessilis* (Miq.) Makino)」であり、「ドウダンツツジ (*E. preulatus* (Miq.) C.K.Schneid.)」とは別種となる。ドウダンツツジは「アブラツツジ」が枝物として流通する際に用いられる通称で、以後、本マニュアルでは「アブラツツジ」をドウダンツツジと呼称する。なお、通称と種名を区別するために、種名は括弧書き（例：「ドウダンツツジ」）で表記する。

## ※「アブラツツジ」と「ドウダンツツジ」の比較

### 「アブラツツジ」

(ホウキヤシオ、ヤマドウダン ※)  
*E. subsessilis* (Miq.) Makino

- **産地**：本州中部以北の山地に自生する
- **用途**：切り枝として室内の装飾等に用いられる
- **さく果**：ほぼ円形、**下向きにつく**



花



さく果

### 「ドウダンツツジ」

*E. preulatus* (Miq.) C.K.Schneid.

- **産地**：本州中部、四国、九州の山地にまれに自生する
- **用途**：庭木、鉢植え、公園樹等で広く用いられる
- **さく果**：狭長楕円形、**上向きにつく**



花



さく果

※日本名の別名は牧野新日本植物図鑑（増補改訂）より引用

## Ⅱ 育苗場所の準備・作成

### (1) 用意する資材

- 防草シート (幅 1 m)
- 遮光ネット (黒色、遮光率 70%) (幅 2m)
- 竹すだれ
- ダンポール 5.5 mm×1.8m

### (2) 設置手順

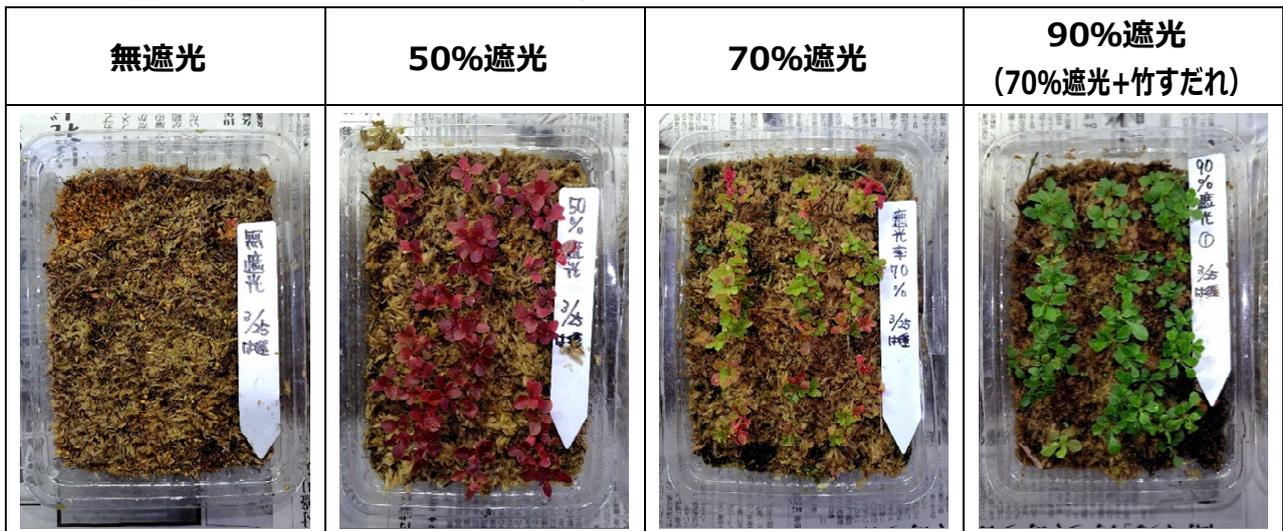
	1) 地面に防草シートを敷き、ピンで固定する。 ※100 株程度の苗を育苗するのに、約 2 m <sup>2</sup> のスペースが必要
	2) ダンポールでトンネルを作り、遮光ネットで覆う。
	3) 遮光ネットの3 辺を土等で抑え、しっかりと固定する。残りの1 辺は鉄パイプ等で押さえておき、開閉できるようにしておく。
	4) 遮光ネットの上に竹すだれをかける。

## コラム① 遮光資材について

### ドウダンツツジの育苗では遮光と風通しが重要である

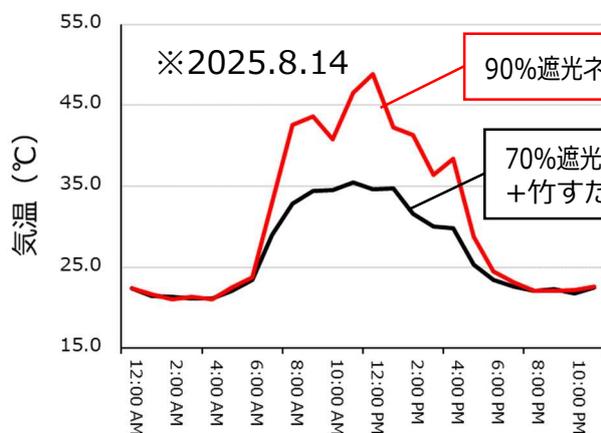
#### (1) ドウダンツツジに最適な遮光率

- ドウダンツツジは風通しが良く、遮光率 90%程度の薄暗い環境を好む。
- 無遮光あるいは遮光率 50~70%程度の環境では、葉の紅葉や枯死といった生育障害が発生する恐れがある（下写真参照）。



#### (2) 遮光資材について

- 前述の通り、ドウダンツツジの育苗には遮光率 90%程度が適する。
- しかし、市販されている 90%遮光ネットは、目が細かいため風通しが悪く、トンネル内の気温が上昇しやすく、ドウダンツツジの育苗には不向きである。
- 現状では、70%遮光ネットの上に竹すだれを重ねる遮光方法が最適である。



育苗環境の平均気温は、70%遮光ネット+竹すだれ区で **20.8°C** なのに対し、90%遮光ネット区では **31.6°C** と、10°C以上高くなった。

90%遮光ネットで育苗した苗は、高温によって全て枯死してしまった（2025年度試験）。

遮光資材による気温推移の違い

### Ⅲ 実生苗の増殖技術 ①採種編

#### (1) 用意するもの

- 新聞紙
- ふるい（1mm目合い）
- 密閉容器（ビン等）
- シリカゲル（乾燥剤）

#### (2) 採種

- 採取は11月中旬を目安に行い、黄色く熟したさく果を採取する（下写真参照）。
- ドウダンツツジは毎年開花するとは限らず、採種量も年によって豊凶差がある。5月上旬頃の開花時期に株の様子を観察して、事前に採種ポイントを探しておくといよい。

#### 注意！

採種は11月中旬を目安に行うが、さく果の様子をよく観察した上で採種する。さく果が緑色で未熟な状態で採種すると、その後乾燥させてもさく果が割れず、種子選別の労力が大幅に増加する。一方、時期が遅くなるとさく果が自然にはじけてしまい、採種量が減少する。



左：未熟果 中央：適熟果 右：過熟果

#### (3) 種子調整作業

- 採集した種子は、新聞紙の上に広げてエアコンのきいた室内（設定温度：23℃程度）で1日乾燥させる。さく果が全体の9割ほどはじけていけば乾燥は完了。
- 乾燥させたさく果を手でもみこみ、中に入っている種子を取り出す。
- 播種作業を円滑に進めるため、1mm目合いのふるいを使ってさく果の殻等のゴミを取り除く。
- 選別した種子はビン等の密閉容器にシリカゲルと一緒にに入れて冷暗所で保管する。



左：乾燥前 右：乾燥後



ふるいにかけて選別した種子（左）とゴミ（右）

### Ⅲ 実生苗の増殖技術 ②種子選別（水選）編

#### （1）用意するもの

- ドウダンツツジ種子      ○ 容量 500ml 程度の容器
- あくとり用のザル等（浮遊種子の除去用）

#### （2）種子選別のタイミングについて

- 水選による種子選別は、基本的に播種する直前に実施する。水選後 1 か月程度は問題なく発芽することを確認しているが、それ以降についての知見はない。

#### （3）選別手順

- 容器の 7 割ほどに水を入れ、そこにドウダンツツジの種子を投入する。一度の投入量は 1g 程度とする。
- ドウダンツツジの種子全体が水で濡れるようによく攪拌する。

#### 注意！

ドウダンツツジの種子は水をはじきやすいため、1 分程度かけて攪拌し、種子全体が濡れているか確認する。

- 1～3 時間程度水に浸漬する。その間も適宜攪拌し、水に濡れていない種子や容器の壁面に張り付いてしまった種子がないか確認する。

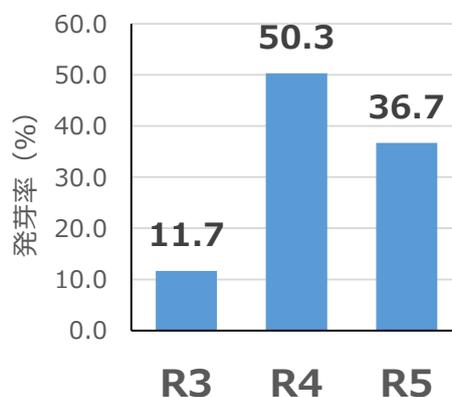
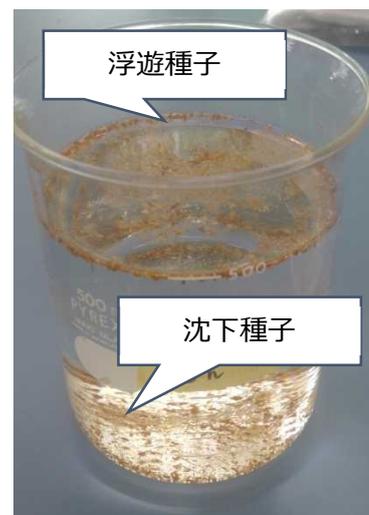
#### 注意！

長時間水につけたままにすると不稔種子も沈下する恐れがあるので、浸漬時間は最長でも 6 時間までとする。

- 所定の時間浸漬したら、水を浮遊している種子はあくとりザル等を用いて取り除く。
- 沈下した種子は、新聞紙の上に広げ、エアコンのきいた室内（設定温度：23℃程度）で乾燥させる。

#### ※なぜ種子の選別作業が必要なのか？

- ドウダンツツジ種子の発芽率は採取する場所や年によって変動する。
- 水選を行うことで、種子の発芽率を 9 割前後まで上げることができ、作業負担の軽減につながる。



年次別ドウダンツツジ種子発芽率

### Ⅲ 実生苗の増殖技術 <sup>はしゅ</sup>③播種編

#### (1) 用意するもの

- ドウダンツツジ種子（水選済みのもの）
- スプレーボトル（かん水用）
- 水苔（細かく砕いたもの）
- 鹿沼土（細粒）
- 育苗箱（推奨サイズ：6型（265×183×77 mm））

#### 注意！

- 育苗箱は、底がメッシュ状になった通気性、通水性の良いものを使用する。
- 鹿沼土について、播種床には粒サイズ1~2 mm程度の細粒のものを使用する。粒サイズの大きい鹿沼土を使用すると、かん水の際に種子が流失する恐れがある。



6型育苗箱（メッシュ状容器）



鹿沼土（左：細粒、右：小粒）

#### (2) 播種時期について

- 播種時期は3月中旬～4月中旬とする。4月上旬に降霜の恐れがある地域では、発芽直後の降霜害を避けるため、4月以降に播種するのが安全である。

#### (3) 播種量の目安について

- ドウダンツツジの種子（選別済み）の重さは1000粒当たり約0.5gである。
- 厚まきに注意する。6型育苗箱（265 mm×183 mm）では、500粒程度を播種量の目安とする。なお、500粒（約0.25g）は小さじ3分の1程度の量である。



ドウダンツツジ種子の播種量目安  
（小さじ3分の1程度）

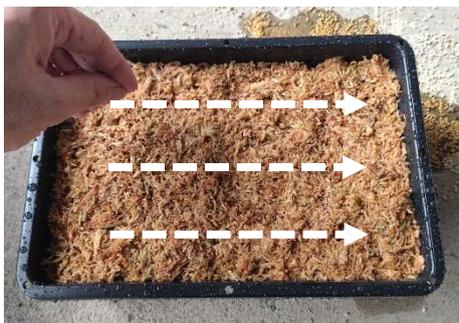
#### (4) 作業手順



1) 育苗箱に高さ 4 cm程度まで鹿沼土を充填する。鹿沼土の上に、細かく砕いた水苔を 1 cm程度の厚さになるように敷き詰める。水苔は、事前に水につけて吸水させておき、水を固く絞った状態で敷き詰めること。

敷き詰めた水苔は手で押さえて表面が平らになる程度に均す。

2) 充填が完了したらジョウロでかん水し、全体に十分に水を含ませる。この際、水はけを確認し、水が瞬時に引くことを確認する。地表面に滞水するようなら育苗箱を別にものに変更する。



3) ドウダンツツジの種子を筋状に播種する。この際、種子に覆土はせず、そのままにする。播種後は乾燥防止のために新聞紙等で育苗箱を被覆する。

#### 注意！

育苗箱の被覆に使用する資材について、アルミホイル等の完全に遮光してしまうものを使用すると、発芽率が減少する恐れがある。



4) 播種後から発芽がそろうまでは、水苔の表面が乾燥しないようにかん水する。

#### 注意！

かん水はスプレー（霧吹き）で行う。ジョウロやシャワーノズルで勢いよくかん水すると、水流で種子が流される恐れがある。



5) 2～3 週間程度で発芽し、さらに 7～10 日程度で発芽がそろう。発芽を確認した時点で被覆していた新聞紙は取り除く。

### Ⅲ 実生苗の増殖技術 ④鉢上げ編

#### (1) 用意するもの

- 育苗ポット（直径 7.5 cm）
- 鹿沼土（小粒）
- ピートモス
- ピンセット（真っすぐで、長さ 20 cm程度の方がよい）

#### (2) 鉢上げ時期について

- 鉢上げ時期は播種後 80 日前後（6 月上中旬）を目安とする。タイミングが遅れると根の伸長に悪影響を及ぼすので注意。
- 播種後 80 日前後の移植が難しい場合、翌年 3 月頃（萌芽前）の移植も可能。

#### (3) 使用する培土について

- 培土は、鹿沼土（小粒）を 6 割、ピートモスを 4 割程度の割合で混ぜたものを使用する。
- ピートモスは混ぜる前に適度に吸水させておくこと（※水分が多すぎると作業しにくくなるため、手で握って軽く崩れる程度を目安とする）。



#### (4) 鉢上げ時期の苗の状態について

- 鉢上げ時期の苗は、地上部は 1 cm 程度（本葉 2~4 枚）、地下部（根）は 4~5 cm 程度まで伸長している。
- 根は非常に細く、傷つきやすいので、掘り取る際は丁寧に扱う必要がある。



鉢上げ時期の苗の様子

#### 注意！

鹿沼土について、挿し床には粒サイズ 2~5 mm 程度の小粒のものを使用する。



鹿沼土（左：細粒、右：小粒）

## (5) 作業手順



1) 育苗ポットに培土を充填する。苗を移植するポットの中央付近にピンセットで穴をあけておく（ポットの底まで届くように培土をほぐすイメージ）。

2) 育苗箱の苗の列に沿って、培地ごと苗を掘り取る（左図）。



3) 掘り取った苗の中から、根を切らないように1株苗を取り出す。ピンセットの先端と根の先端を合わせ、根全体を優しく包み込むように苗を持つ。この際、ピンセットで強く挟んで根を傷つけないように注意。



4) 根を伸ばした状態のまま、事前にあけておいたポットの穴にピンセットを差し込んで苗を静置する。ピンセットを抜いたら周囲の培土を軽く寄せて穴をふさぐ。



5) 鉢上げが完了したら、ジョウロでたっぷりかん水し、根と培土を密着させる。移植後2週間程度は培土が乾かないようにこまめにかん水すること。

## IV 挿し木苗の増殖技術

### (1) 用意するもの

- ドウダンツツジ挿し穂（育苗箱1つ当たり40本程度を目安とする）
- 育苗箱（推奨サイズ：51型（326×477×76mm））
- 被覆用ビニール
- 鹿沼土（小粒）
- スプレーボトル（かん水用）
- ピートモス
- 剪定鋏（切れ味のよいもの）

#### 注意！

- 育苗箱は、底がメッシュ状になった通気性、通水性の良いものを使用する。
- 鹿沼土について、挿し床には粒サイズ2～5mm程度の小粒のものを使用する。



51型育苗箱（メッシュ状容器）



鹿沼土（左：細粒、右：小粒）

### (2) 挿しつけ期について

- 挿しつけ時期は6月中旬～7月上旬の緑枝挿しとする。

### (3) 使用する培土について

- 培土は、鹿沼土（小粒）を6割、ピートモスを4割程度の割合で混ぜたものを使用する。
- ピートモスは混ぜる前に適度に吸水させておくこと（※水分が多すぎると作業しにくくなるため、手で握って軽く崩れる程度を目安とする）。



### (4) 挿し木床の準備について

- ドウダンツツジの挿し木はビニールで被覆した「密閉挿し」とする。ビニールで被覆する際は、ダンポール等を用いて高さ1m程度の空間を確保できるようにする。

#### 注意！

挿し床の設置場所は直射日光の当たらない軒下やよしず等で遮光した場所とする。

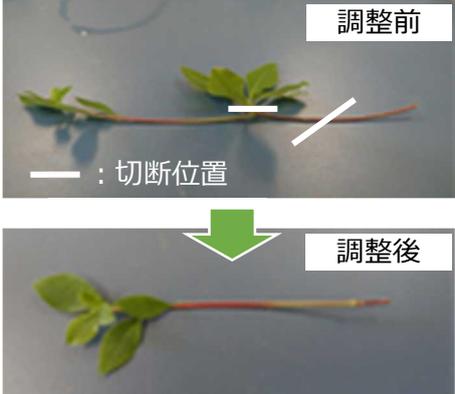


## (5) 採枝方法について

- 挿し穂にはその年に伸びた新梢（樹皮の色は赤もしくは緑）を用いる。
- 枝の先端から 10 cm 程度の長さを確保して切る（右写真参照）。
- 挿し穂の本数は、1 つの育苗箱（51 型）につき 40 本程度を目安とする。



## (6) 作業手順

	<p>1) 採種した挿し穂の基部を斜めに切り、下葉も取り除く。切断には切れ味の良い剪定鋏等を用いる。この際、先端から 7～9 cm 程度の長さを確保する。</p> <p>2) 調整した挿し穂は 1 時間ほど水揚げする。</p>
	<p>3) 育苗箱に深さ 5 cm 程度になるように培土を充填し、十分にかん水し、湿らせておく。</p> <p>4) 挿し床には、挿しつけする場所にあらかじめ爪楊枝を使って深さ 3 cm 程度の穴をあけておく。挿し穂の間隔は 5 cm 程度とする。</p>
	<p>5) 穴に挿し穂を挿す。深さは、挿し穂の 3 分の 1 程度とする。</p> <p>6) 挿しつけが完了したら、ジョウロでたっぷりかん水し、挿し穂と培土を密着させる。</p>
	<p>7) 挿しつけ後 1 か月程度はスプレーボトルを用いて 1 日 1～2 回かん水する。</p> <p><b>注意！</b></p> <p>かん水量は葉の濡れ、培土の表面が湿る程度とする。過度のかん水は発根に悪影響を及ぼすので注意（ジョウロでのかん水も避ける）。</p>

 <p>挿しつけ 3 か月後の発根状況</p>	<p>8) 1 か月程度すると発根する。発根せずに枯れた挿し穂は取り除く。</p> <p><b>注意!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発根の適温は 25℃前後と言われており、挿し床内の気温は高くても 35℃を超えないように管理する。</li> <li>○ 挿し床内の湿度 70%以上を保つため、すきま風が入り込まないようにしっかりと密閉することが重要である。</li> <li>○ 7～8月に挿し穂の葉が紅葉した場合、日差しが強い可能性があるため、挿し床の設置場所を変えるか、遮光ネットやよしずを用いて遮光を強める。</li> </ul>
	<p>9) 11月中下旬に挿し穂の葉が落葉したら、ビニールを除去する。あるいは霜よけのために冬の間そのままにしている問題ない。</p>

### (7) 挿し木苗の移植について

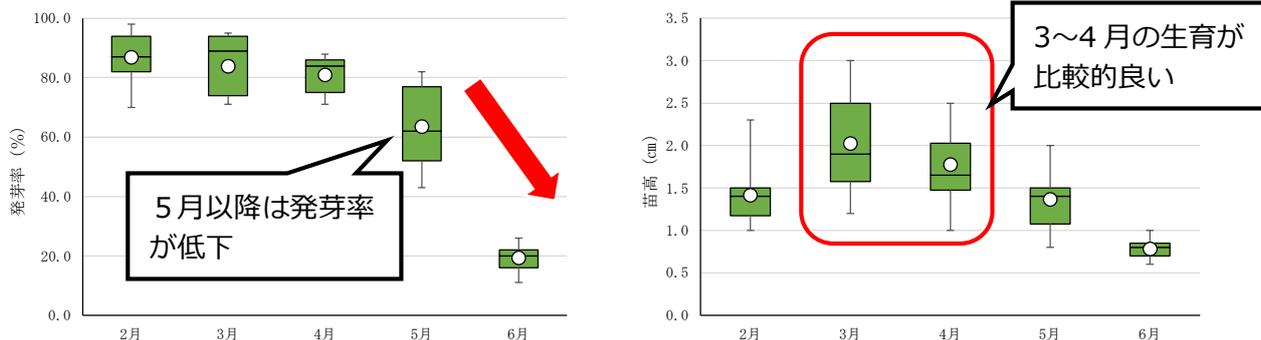
- 挿し木苗の移植時期は展葉直前の 3 月下旬を目安とする。
- 苗の移植手順は「Ⅲ実生苗の増殖技術④鉢上げ編」(8 ページ) の (5) 作業手順を参照。
- 移植するポットの大きさは 7.5 cm～9 cm (直径) とする。

## コラム② 播種・挿しつけの適期について

### ドウダンツツジの播種及び挿し木は適期に実施することが重要である

#### (1) ドウダンツツジの播種時期別発芽率及び生育状況

- ドウダンツツジ種子は3月から4月が播種適期であり、発芽率やその後の生育が他の時期に比べて良い。
- 一方で、5月以降は発芽率が著しく低下するため、播種遅れには注意する。



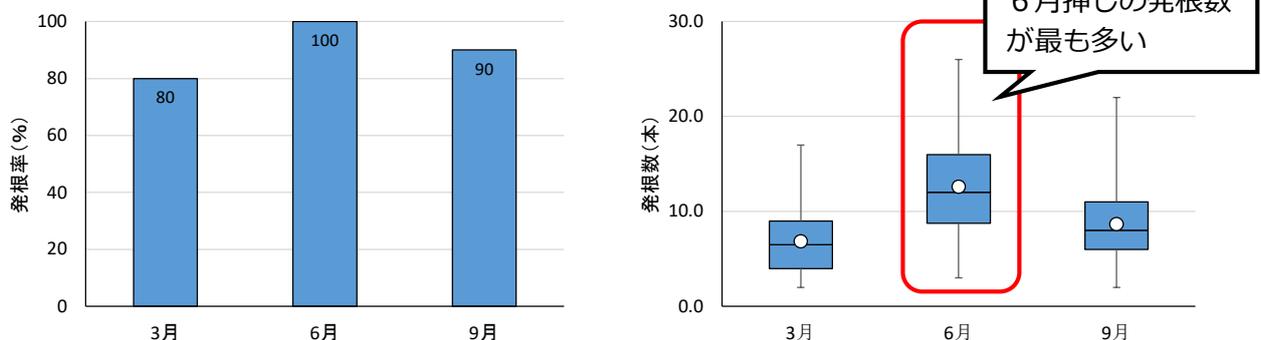
#### 播種時期別ドウダンツツジ発芽率（左）及び苗高（右）（2023-2025年）

※播種日：2/19、3/21、4/18、5/20、6/20

※箱ひげ図における箱は四分位範囲であり、上線は全データの上位25%、中線は50%（中央値）、下線は75%を示す。また、ひげは最大値と最小値を、○は平均値をそれぞれ示す。

#### (2) ドウダンツツジの挿しつけ時期による発根率及び発根数

- 6月挿しにおけるドウダンツツジの発根率は100%である（2021-2023年試験結果）。
- 6月挿しでは、挿しつけ後の発根数が他の時期に比べて多い。



#### 挿しつけ時期別ドウダンツツジ発根率（左）及び発根数（右）（2021-2023年）

※挿しつけ日：3/10、6/8、9/24

## V 追肥方法

### (1) 用意するもの

- 微粉ハイポネックス (N-P-K=6.5-6-19)
- ジョウロ

### (2) 追肥時期について

- 実生苗 : 1年生苗は6~8月、2年生以降の苗は4~6月に実施する。
- 挿し木苗 : 1年生苗(挿しつけ当年の苗)は追肥を行わず、2年生苗は4~6月に実施する。

### (3) 追肥方法について

- 微粉ハイポネックスを500倍に希釈し、10日毎にかん水も兼ねて施肥する。
- 1株当たりの処理量は20ml程度を目安とする。
- 1年当たりの追肥の回数は合計8回までとする。

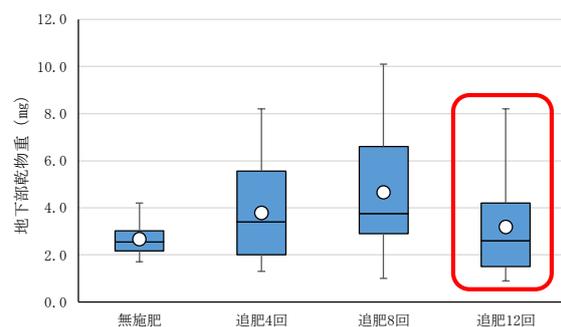
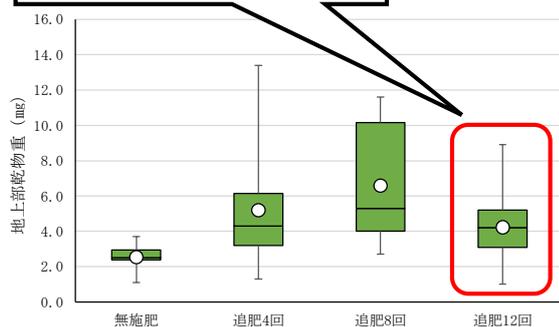
### 注意!

- 追肥のやりすぎには注意する。
- 追肥回数が多すぎると、苗の生育が劣る恐れがある他(下グラフ参照)、培土にゼニゴケが繁茂して水はけが悪くなる恐れがあるため、散布液量及び回数は適性の範囲内で実施する。



追肥苗(左)で繁茂したゼニゴケ

追肥12回実施した苗では生育が劣る



### 追肥回数別ドウダンツツジ苗の生育状況(左:地上部乾物重、右:地下部乾物重)

※追肥方法:肥料は微粉ハイポネックスを用い、希釈倍率500倍、1回あたりの処理量は20mlとした(2025年度試験)

※箱ひげ図における箱は四分位範囲であり、上線は全データの上位25%、中線は50%(中央値)、下線は75%を示す。また、ひげは最大値と最小値を、○は平均値をそれぞれ示す。

## VI 厳寒期の管理

### (1) 用意するもの

- 寒冷紗

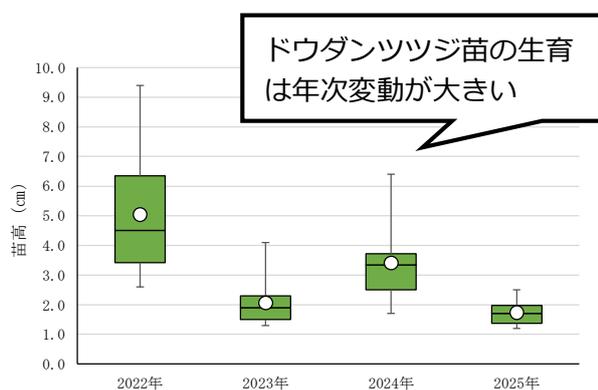
### (2) 厳寒期の管理について

- 越冬の準備のため、9月以降は追肥を控え、苗の生育を止める。
- ドウダンツツジは12月上旬頃に落葉する。
- 落葉後も土壌が乾ききらない程度にかん水を行う。
- 降霜による根へのダメージを避けるため、降霜期には霜よけ対策として、トンネルの上から寒冷紗で被覆する。
- 3月以降、新芽が動き出し、葉が展開し始めた段階で寒冷紗を取り外す。

## コラム③ ドウダンツツジの育苗期間について

### ドウダンツツジの育苗期間は2～3年を目安とする

- 植栽適期である苗高20cm程度まで成長するには、およそ2～3年の期間が必要である。
- ただし、苗の生育には年次変動があるため、3年目になっても目標の苗高まで成長しない可能性がある点について注意が必要である。



年次別ドウダンツツジ1年生苗の苗高

ドウダンツツジ3年生苗

※3月播種、10月時点の苗(20株)の生育状況

※箱ひげ図における箱は四分位範囲であり、上線は全データの上位25%、中線は50%(中央値)、下線は75%を示す。また、ひげは最大値と最小値を、○は平均値をそれぞれ示す。

## VII 苗の植栽方法

### (1) 用意するもの

- ドウダンツツジ苗（苗高 20 cm程度、主幹径 1.5 mm程度を目安とする）

### (2) 植栽場所の選定について

- ドウダンツツジの生育に適する環境は以下の①～⑤のような特徴があり、これらの条件を満たす場所に植栽するのが望ましい（生育地に関する詳細は「X【参考】ドウダンツツジの生育環境について（19 ページ）」を参照）。
  - ① 山の尾根筋や山頂付近など、風通しや水はけのよい環境
  - ② 直射日光の当たる時間の短い北～北西～西向きの斜面
  - ③ 斜度 20～30°程度の傾斜地
  - ④ 相対照度 10%程度の薄暗い環境
  - ⑤ 土壌 pH3～4 程度（KCl 抽出）の酸性土壌
- ドウダンツツジと生育環境が似ている植物として、ケヤキ、ブナ、アカマツ、アセビ、ヤマツツジ、ヒノキ、イワウチワ等があり、植栽地を決める上での目安となる。



植栽した苗の様子

### 注意！

- 植栽場所を決める上で、水はけのよさは非常に重要である。ジメジメと湿っぽい環境はドウダンツツジの生育には適さないので注意する。
- アオキやヤマアジサイ等が生えている環境は、ジメジメと湿り気がある。また、スギが植林されている場所も沢浴い等の湿った環境が多いので、こうした場所は避けるべきである。



アオキ



ヤマアジサイ



スギ

### (3) 植栽時期について

- 植栽時期は 3 月中下旬を目安とする。
- 植栽場所の選定等の都合で 3 月植栽が困難な場合は、6 月中旬植栽でも可能。

## Ⅷ 育苗スケジュール

### (1) 実生苗の育苗スケジュール

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
採種年												採種
1年目		種子選別	播種			鉢上げ		追肥	9月以降の追肥は控える		寒冷紗被覆	
2年目以降	寒冷紗被覆		鉢上げ	追肥							寒冷紗被覆	

播種後80日前後での鉢上げが難しい場合は、翌年3月中下旬に実施する

新葉展開前の3月中下旬に実施する（3年目以降は不要）

### (2) 挿し木苗の育苗スケジュール

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1年目						挿しつけ					寒冷紗被覆	
2年目以降	寒冷紗被覆		鉢上げ	追肥							寒冷紗被覆	

かん水※

※：挿しつけ後1か月程度は1日1～2回の頻度で毎日かん水

## IX ドウダンツツジ苗の生産コスト

### (1) 生産コスト試算の前提条件

- 200 株の苗を 3 年間育苗し、100 株の植栽用苗を得た場合を想定した金額である。
- ドウダンツツジの種子や挿し穂にかかる金額は含めていない。

### (2) 実生苗育苗の生産コスト

分類	資材内訳	金額
育苗場所	防草シート (幅 1m)	7,848 円
	ダンポール (5.5 mm×1.8m)	
	遮光ネット (遮光率 70%、黒色、幅 2m)	
	竹すだれ	
	寒冷紗 (幅 1.8m)	
種子選別	ふるい (1 mm目合い)	1,233 円
	シリカゲル	
	あくとり用のザル	
育苗容器	育苗箱 (6 型)	524 円
	育苗ポット (直径 7.5 cm)	
培土	水苔	6,497 円
	鹿沼土 (細粒)	
	鹿沼土 (小粒)	
	ピートモス	
肥料	微粉ハイポネックス	824 円
その他	ピンセット	479 円
合計金額		17,405 円
1 株当たり金額		174 円

### (3) 挿し木苗育苗の生産コスト

分類	資材内訳	金額
育苗場所	防草シート (幅 1m)	9,047 円
	ダンポール (5.5 mm×1.8m)	
	遮光ネット (遮光率 70%、黒色、幅 2m)	
	竹すだれ	
	寒冷紗 (幅 1.8m)	
	ビニール (1.85m×5m)	
育苗容器	育苗箱 (51 型)	1,519 円
	育苗ポット (直径 7.5 cm)	
培土	鹿沼土 (小粒)	9,790 円
	ピートモス	
肥料	微粉ハイポネックス	824 円
その他	ピンセット	1,359 円
	剪定鋏	
	スプレーボトル	
合計金額		22,539 円
1 株当たり金額		226 円

## X 【参考】ドウダンツツジの生育環境について

### (1) 茨城県内におけるドウダンツツジの生育地

#### 1) 市町村分布<sup>a)</sup>

…北茨城市、高萩市、大子町、旧水府村（※1）、旧美和村（※2）、  
旧緒川村（※2）、旧桂村（※3）、日立市

※1：現常陸太田市、※2：現常陸大宮市、※3：現城里町

#### 2) 山地分布<sup>b)</sup>

…鍋足山、久慈山地（鷲子山、青麻山）、花瓶山、  
花園山、土岳 等



### (2) ドウダンツツジ生育地の特徴

#### 1) 地形

- 尾根筋や山頂付近の風通しや水はけのよい環境
- 平坦地ではなく、傾斜 10 度以上の傾斜のある環境
- 日の当たる時間の短い北向き斜面

#### 2) 土壌

- 土壌 pH3~4 程度（KCl 抽出）の酸性土壌
- 腐植土が深さ 10~20 cm 程度堆積したフカフカな土壌

#### 3) 周囲の植生

- ケヤキ、ブナ、アカマツ、アセビ、ヒノキ、イワウチワ 等
- 高木で被陰された薄暗い環境（相対照度 10%程度）



ドウダンツツジ生育地の土壌

→腐植土が堆積しており、水はけ良い



ドウダンツツジ生育地

→薄暗いが、ジメジメしていない

### ※参考文献

a) 茨城県植物誌、茨城県植物誌刊行会、1981.9

b) 茨城県北東部地域の維管束植物、茨城県自然博物館第 3 次総合調査報告書 119-196、2004.3  
茨城県北西地域の維管束植物、茨城県自然博物館第 4 次総合調査報告書 113-186、2007.3

### (3) ドウダンツツジ生育地の様子

#### 1) 鍋足山 (常陸太田市)



→山頂付近、岩肌の急斜面に群生している。

#### 2) 土岳 (高萩市)



3月30日撮影

→尾根筋沿いに群生している。ドウダンツツジの群生地付近ではイワウチワ (左写真) が観察されることが多く、生育地を見つける際の判断基準となる。

#### 3) 生育地の全天写真 (撮影日: 5月24日~6月6日)



→生育地の頭上はケヤキ等の落葉高木で覆われており、直射日光はほとんど届かない。





**本マニュアルに関するお問い合わせ**

**茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所**

住所：茨城県久慈郡大子町頃藤 6690-1

電話：0295-74-0821